

広報委員会 国内外情報発信強化分科会

(第 26 期第 1 回) 議事概要

1. 日 時 令和 6 年 2 月 8 日 (木) 10 : 00 ~ 12 : 00
2. 場 所 オンライン開催
3. 出席 者 中村委員、奥野委員、狩野委員、隠岐委員、加納委員、岸村委員、高田委員
4. 議 事

(1) 役員の選出について

- ・委員長の互選を行い、狩野委員を選出した。
- ・狩野委員長が副委員長として加納委員を指名し、承認された。なお、幹事については、現時点では置かないこととした。

(2) 分科会の活動方針と内容について

- ・狩野委員長より、本分科会の任務について、学術会議の情報発信について状況をよりよくしていくための検討を行う旨説明がされ、意見交換を行った。

(意見交換)

○外部への情報発信について

- ・第 25 期において、何かを発信する際に言い方等の精査に時間がかかることがあった。より必要なタイミングで発信できる体制を整えることが望ましい。
- ・単にホームページに載せたらそれで広報というわけではないのではないか。もっと国民に理解してもらえるようにするには、例えば SNS をより活用するのはどうか。若年層が日本の学術の未来について考えるような発信ができるといい。
- ・発信というが、広報は本来伝えるだけではない。聴く活動、何かをともに作り上げる活動が理想である。また、5W1H だけでなく、誰に向けての内容か、も考えなくてはならない。
- ・政策立案を学術会議がその英知により助言できればよりよい。政策立案といったことを意識して国民に分かりやすく発信することも要るのではないかな。
- ・政策立案を意識して、といっても、それに関連していても、できるだけ中立性を心がけた内容であることは必要。この点は国際組織も悩みを持っている。政治と科学の中で重なる領域、例えば人類全体の福祉、環境問題、SDGs など、特定の集団の利害関係ではなく、人類全体の福祉につながり得るようなものは積極的に発信することが重要。
- ・学術会議の提言等が出たとき、現在はホームページを見にいかなければならない。提言発出の通知や提言の内容に関する動画をメルマガ等で送付するなどできないか。
- ・学術会議としていろいろなシンポジウムをやっているが、どちらかというと講演など一方通行的な方法がメインになっているのではないかな。各地区の学術講演会など、せつかく地域でやるのだからもっとステークホルダーと議論し、対話することもできるのでは。サイエンスカフェも同様。社会との対話の仕組みをどう作るのが重要。
- ・学術会議からの提案が実現された例など、好事例も発信するといいのではないかな。

○学術会議内部・学協会・関係者への情報発信

- ・学術会議内部で多様な意見をどう集めて活動に反映させていけるか。また何が現在学術界以外でも注目すべきと思われる社会の課題かを、学術会議内部にも共有する機会が必要ではないか。
- ・科学者も、まずは社会の一構成員である。
- ・学術会議が取り組んでいる中には高校生や若い人の方が感度が高い内容もある。学術会議だけでは若い人へのリーチが難しいかもしれないが、一般学会には学生もたくさんいるので、一般学会を通じると何かつなげられるのではないか。
- ・内部に対する広報も重要。連携会員等になり得る学協会の科学者の皆さんも視野に入れておく必要がある。日本学術会議のポジティブな面も共有していくべき。
- ・大学の構成員やアカデミアの方々に対してもっと能動的にコミュニケーションをとっていくべき。
- ・現状、学校関係者や行政関係者などステークホルダーの意見を聞く仕組みがない。公開可能なもの（イベント、分科会）は公開した上で、パブコメのような、定期的に意見を聴くという場を設定するのもあり得る。

○リスク管理について

- ・情報発信にはリスクはつきもの。全方位に好意的に理解してもらえる情報発信は無理、という前提で、何をできるか考えるしかないのではないかと。リスク管理のマニュアルは作りにくい。どんなクレームが来るかはある程度予想できるので、その対応を考えて共有しておくやり方しかないと思う。その時々で何を出すか、塩梅の問題。
- ・前期に作成した動画も一方通行的であったという振り返りはある。より対話の場を設けられたらと思う。一般の方もそうだが、高校生や大学生などの若い世代へのアプローチもあり得る。
- ・メディアに真意が伝わりやすい表現は工夫の余地がある。メディア対応のトレーニングプログラムなどがあってもいいのではないかと。海外のアカデミー、例えばイギリスのロイヤルソサエティーでは対価が必要なメディアトレーニングプログラムの提供がある。

○その他

- ・パンフレットについては伝統的なメディアであることも踏まえ、あまり変えない方がいいのではないかと。むしろ、それはそれとして、別の新規メディアの立ち上げ、どこをターゲットにすると対話をメインにするとかを考えた方がいいのでは。
- ・物理的なパンフレットについては、今ペーパーレスが言われている昨今、どこまで必要かというのは疑問。ネット掲載と並行して、印刷部数は減らすことはできるのではないかと。
- ・学術会議の歴史をホームページ等で取り上げる必要があるのではないかと。
- ・学術の動向について、良いものを作っているのに発信が弱いと感じる。何かのイベントのときにチラシを置くとかそのイベントに関連する号を置くとかするといった方がいいかもしれない。